

南蛮の風紀行－22. 孤愁のザビエル城(その2)



ザビエルの肖像画はたくさんあります。日本では頭頂部をそり込んだ黒衣の姿が有名です。でも、わたしのイメージに一番近いのがこの肖像画です。日本ではいつの間にか、頭頂部の髪の毛をそり込んだ肖像画がザビエルだと思われてきましたが、少なくともイエズス会の司祭たちに、そんな習慣はありません。実際、スペインであったザビエルは全て総髪でした。

ところでザビエルという彼の名字のことです。ザビエル城とわたしも言ってしまいましたが、実は現代のスペイン語では **Javier** 書いてハビエルです。また、古いバスク語で **etxe** (家) **berria** (新しい) と呼ばれていたのが、当時のスペイン語やポルトガル語で **Xavier** と綴られてシャビエルと発音されていたようです。従って彼の名字を由緒正しく発音すると、一番近いのがシャビエルであり、現代の地元での呼称はハビエルということになるのです。それではザビエルという名が通ってしまったのはなぜでしょう。

実はイタリア語ではザビエルに近い発音になりますから、きっと宣教師同士での正式な名前として発音していたのが、当時の日本人にはザビエルと聞こえたのではないのでしょうか。この城をお尋ねになりたい方は城の名前も、すぐ近くにある村の名前も **Javier** つまりハビエルだということを忘れないでください。

それにしてもザビエル城の醸し出す孤独感のような悲しみはどこから来るのでしょうか。この城が造られたのは10世紀で、当時はまだイベリア半島はイスラム教徒との戦いレコンキスタの最中でした。つまり、イスラム勢力と対峙するための最前線の砦として建設されたようです。

その後、この城がナバラ王国の物になったいきさつが面白いのですが、それは1223年、当時のこの城とこの辺りの荘園の持ち主であったアラゴン王国の1貴族がナバラ王に借金をして、それを返せなくなってカタに取られてしまったのです。

その当時のナバラ王国のサンチョ7世は豪勇王と呼ばれていたのですが、どうゆうわけか裕福で金を貸しては、城や領土を戦争ではない方法で手に入れていました。豪勇と言うよりは算術に長けた人だったようです。その後、何度か城主を変え、16世紀初頭にはザビエルの母親の実家であるアスクルピエタ家の物になっていました。ザビエル家はピレネー山脈の山の中のサン・ジャン・ピエ・ド・ポールという小さな町の旧家でしたが、ザビ



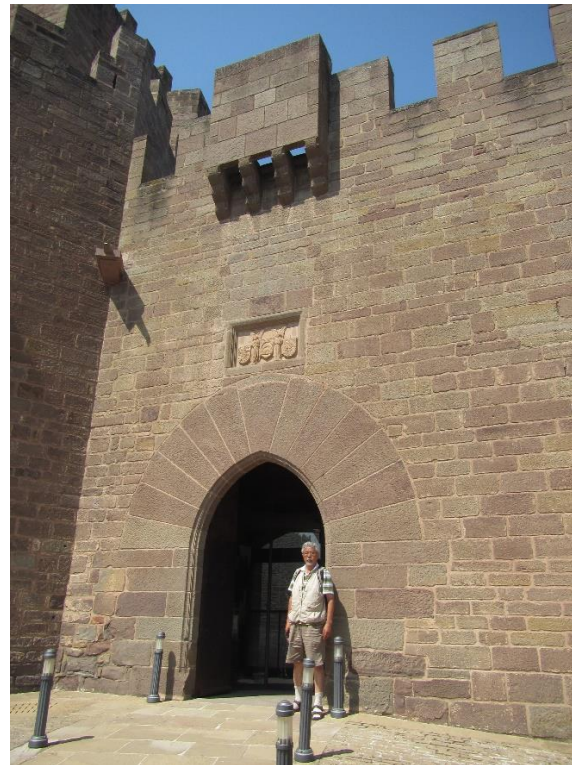
ザビエル城の周りの山はルンビエール溪谷と呼ばれている古い石灰岩質の地層で、日本でいうと秋吉台や平尾台のようなカルスト台地を構成しています。

エルの父親がナバラ王の側近となったため、当時跡取りのいなかったアスクルピエタの娘と結婚して、妻と城とを一度に手に入れたというわけです。それほど、ザビエルの父親は王のお気に入りだったとも言えます。何となく上杉謙信に気に入られた直江兼続の結婚のいきさつを連想させますね。

さて、ナバラ王がアラゴン王に攻められてフランスに逃げた後、ザビエル城は廃城になる運命でした。しかし、どうやら外周の城壁などを壊しただけで、主要部分はその後も貴族の住居として存続したようです。それなのになぜこの城は孤独なののでしょうか。それはこれからもゆっくりと考えていきたいと思っています。

ただ、ザビエルという人の面影を思う時、彼が幼少期を過ごした生家が、こんな無骨で王都からも周囲の集落からも離れた場所だったということが、彼の性格というか人生観といったものに少なからず影響を与えたと思わざるを得ません。

ザビエル城を開城した時、まだ幼かった彼は、兄たちがナバラ王国の最高を願ってフランスの庇護のもとに兵士として戦場に立ったのに対して、母の強い意向と兄たち



一時は元貴族の住宅として使われていたのですが、ザビエルが生まれて当時のお城としての姿を復元したため、いたるところに防御のための細工が見えます。この門の上にあるものは門を破ろうとする敵兵に石を落したり、矢を射かけたりするためのもので、日本のお城でも見かけるものです。こんな物騒な城を生家として、ザビエルは育ったのです。



ザビエルに時代のナバラ王国の主城パンプローナ城は現在は、残念ながら当時とは違います。16永輝の終わりごろから18世紀までかけて兵器の進歩に対応する形で改築されて続けたのです。

の庇護によって学者になる道をたどり、ロヨラという同じバスク人の友人を得ることで、宗教の世界へと誘われるという彼の前半生は、戦国期から豊穡期にかけての日本の豪族や小大名に通じる境遇だったともいえるのです。

ザビエルが日本に来た時、すぐに多くの日本人に感動と共感を与え、その後のイエズス会の活動にプラス面での影響を与えたのも、彼が当時の日本人の置かれた社会環境とあまりにも似た人生を送ってきたという背景があったのではないかと、わたしは確信しています。

ザビエルは結局、豊後府内（現在の大分市）春日浦からポルトガル船に乗り込

み、中国での布教に向かい、中国の上川島（現在のマカオの近く）で昇天してしまいます。日本滞在、約2年間、豊後での滞在は2か月でしかありませんでした。それでもザビエルの名前が、わたしたちの心に大きな足跡を残しているのは、ただ単に彼が最初にキリスト教を布教した宣教師であったというだけではなく、彼の素晴らしい人間性が文化の違い、人種の違いをも乗り越えて共感できたからではないでしょうか。

それでもわたしはザビエルが故国を亡くし、難民のような生活苦を味わうことはなかったにせよ、イベリア半島の影の部分からアジアの、そのまた東端の離れ小島の陽の当たる場所に登場せざるを得なかったということ、ザビエルの後しばらくして登場し、同じく日本人の心をとらえて離さなかったアルメイダの、故国を後にせざるを得なかった境遇に重ねて見てしまいます。



ザビエル城は幾多の変遷を経て、現在はイエズス会の所蔵となり、ザビエルの偉業を称えるための博物館になっています。山口での布教を説明するジオラマには、当時の山口の大内や方には無かった天守が見えるのはご愛嬌ですね。